

いと、自分なりに漠然とした意欲を抱いています。その頃には被曝など、多少のことは気にならないでしょう。

さて、前任地の山口県下関市では4年間を過ごしました。そこには歴史の歪みを背負わされたような人たちが多く、貧しくともつつましく暮らす土地でした。自分たちが何か富んでいて見識のある者とされ、ひとのいのちの行く末を運営しているのだと錯覚しがちな時に、今も私が立ち返る原点のひとつがそこにあります。

この地でホスピス医は私一人でした。悲嘆に暮れる遺族の話に耳を傾けてくれるカウンセラーも宗教者もおらず、多忙な日々。週日は六畳一間のアパートで過ごし、週末は家族の待つ福岡へ帰福する。そして月曜になれば、朝4時に自宅のある福岡から中国自動車道を目指して高速道路を駆け登り、下関の病棟での朝7時のひとり回診からまた一週間が始まりました。

下関では複数の施設に関わっていて、そのうち安岡病院で25床のホスピス（緩和ケア）病棟をあずかり、下関市立市民病院でホスピス外来と院内チーム診療を担当していました。

下関はまた雄大な中国山脈と、見渡す限り紺碧な響灘とのあいだに位置しており、日々の自然が豊かな土地でもありました。初夏と初秋には、冷んやりとした山の空気と、病窓に広がる大海原、そして濡れた土と緑の香りが何とも言えぬ郷愁を呼び覚ますのです。雨に濡れる景色を眺めていると山も、町も、海も、すっかり洗い流されてきれいになって行くのがわかります。

そこでは、ホスピスは死がいつも不吉なことからや人生の敗北を意味する結末のようなものではなくて、身内の人々とひと通りの別れの挨拶を交わし、やがて感謝を申し述べて帰っていく必然的な人生の到着点のようなものでした。看護師さんたちが愛情を込めて親身に世話をしてくれる田舎の病院。機械も、人工呼吸器も何もない。25床で平均在院日数約40日。年に200人以上を看取る勘定になります。実際、下関で癌死する患者さんの1／7～9人に私が関わっていました。

でも、何の葛藤もなく毎日を生きて、日々のちと向き合い、ただいのちの本質を慕い求めて生きることができる。幸せでしたね。いつの日かまたどこかの田舎で昔のようにシンプルな暮らしがしたい、そのようなセカンドライフの願いを豊かに適えてくれた土地でもありました。

「癒し、癒される」

「治る病に癒されず、治らぬ病に癒される」

今もホスピスで語り継がれるこのような言葉を、私は生きる毎日として体感していました。

余談ですが、大検なので福岡に出身高校のない私には、沖縄の琉球大学が出自のようなものです。さいわい卒後25年にして、その福岡支部が今年発足しました。先日、初会合が北九州市で開かれ、16人が出席して互いの安否を問い、再会を祝いました。西日本支部会長の赤木先生、鹿児島支部会長の是枝先生、前長崎支部長の土屋先生、そして沖縄から同窓会本部の蔵下会長が（泡盛とともに）駆けつけ、ともに場を盛り上げてくれました。

ハード オア ソフト

我 謝 道 弘

（医療法人おもと会 大浜第二病院）

飛行機が目的地へ近づいた
着陸を人生の最期と重ねた

ソフトランディング

そうありがたい

タッチアンドゴー
死への不安がそうさせる

正々堂々と向きあえばよい
それはかならず訪れるのだから
たとえハードランディングでも

マイブームはロングブレス

外 間 昭

（琉球大学 第一内科）

「外間先生、スリムになったよ。やせたでしょ、絶対そうよ！」

「〇△さん、それ、目の錯覚。眼鏡が合っていないんじゃないの、きっと。」

と、すっとぼけつつも、心の中はガッツポーズ。久しぶりに会った患者さんからこう言われると、とても嬉しいものだ。